



優
秀
賞

茨城県立鹿島高等学校附属中学校 三年

諦めない心をもって

渡^{わた} 邊^{なべ} 桃^{もも} 香^か

「走りたい——。」

私は頭を抱えていました。以前のように、みんなのように、走りたい。運動したい。部活動を、体育を、見学しているとき強く思います。

中学三年生になった春、私は医師から「若年性特発性関節炎」という診断を受けました。関節が痛む指定難病で、膝や股関節、肩、手首、指、腰など様々な場所に痛みが出ます。当然のことながら、痛みがある今は運動することができません。みんなが楽しそうに運動している部活動や体育を見学することは、私にとって思った以上に辛いものでした。

私は中学校に入学すると陸上部に入部しました。種目は長距離。週に四回の部活動だけでなく毎日の筋トレや朝の

ランニングを欠かさず、がむしゃらに練習を頑張ってきました。

けれど、二年生の秋、痛みが突然現れたのです。最初は原因が分からず、リハビリに通い続けていました。それでも痛みはおさまらず、母が色々調べてくれて、専門の病院に行くことになりました。いくつかの検査の後に「若年性特発性関節炎」と病名を告げられ、大きなショックを受けました。さらに、みんなが頑張っている部活動や体育の授業も出られずどんどん置いていかれてしまう、という焦りが私を苦しめたのです。

実は私は、二年生の夏に部活動のキャプテンに指名されていました。憧れのキャプテンに自分がなれたことがとても嬉しく、準備や挨拶など積極的に行うようにしました。

練習も手を抜かず、「ファイト、頑張れ。」のかけ声も率先して言うようにしました。こんなに頑張っていたのに、走れなくなるなんて。なぜ神様はその努力に報いてくれないのだろうと思ひ、「私はなにもできないキャプテンなんだ」と落ち込みました。精一杯頑張っている部員にも心からの「お疲れ様。」が言えませんでした。そんな自分が嫌で嫌で仕方がなかったです。

走れないながらも部活に参加し続ける私に、顧問の先生や部員は、「背負いすぎないで。」とか、「無理しないで。」と優しい言葉をかけてくれました。けれど、そういうふうな気を遣われるのも嫌でした。意地で部活に行く、そんな時に「今日の練習きついなから嫌だな。」という部員の言葉が聞こえました。「私は走れないでいるのに。走れているだけでも良いじゃないか。そういう『当たり前』の環境にずっといると、そのありがたみが分からないんだ。」そう怒りがわいた時、はっと気付いたのです。私も走れなくなるまで同じだったと。怪我している人の気持ちも、病気で苦しんでいる人の気持ちも、分かっているようで分かりきれていなかったのだ、と。

ある日、私は家族と一緒に相撲を見に行くことになりました。最初はあまり気乗りしませんでした、次第に面白

くなりました。ある取組のときのことです。たくさんのお客様は一方の力士の名前だけ大声で応援し、相手の力士を応援する声はほとんど聞こえません。大人気の力士の方が優勢に見えました。それでも、もう片方の力士は最後まで諦めず、必死に一ミリも諦めない。その姿があまりにも素敵で、私は心を打たれ、鳥肌が立ちました。私もあの力士みたいに頑張りたい、踏んばりたい。いつかまた走れるようになる日まで、私も負けない。そう心に誓いました。

それからの私は自分の病気の事を受け入れられるようになり、心が少し落ち着いた気がします。友達ともたくさん話して、たくさん笑っています。それが幸せだと改めて生きていることが嬉しくなりました。現在も月に一度、治療をしています。まだ効果は見られないけれど、いつか効果が出るまで私は負けません。今後の部活動では、自分のできる範囲で精一杯準備をし、頑張る部員をサポートしたいと思います。

「普通」や「当たり前」というのは、自分がそうでなくなつた時に初めて気付くのだと身をもって知りました。その気付きを忘れず、いつかまた「普通」に走れるようになるまで、希望を捨てず、諦めないで頑張ります。